



「ふるさと研究活動」は、子どもからおとなまで、幅広い世代の市民のみなさんの参加により、ふるさと所沢の自然・歴史・芸術・文化・産業など、様々な分野の資料や情報を集め、調査・研究を深めてゆく活動です。「所沢のことをなんでも知りたい！」方のご参加をお待ちしております。



庚寅(かのえとら)でみる所沢の歴史

2010年は十干十二支でいうと「庚寅(かのえとら)」です。寅(トラ)といえば、多聞院の寅まつりや虎の狛犬などを思い浮かべますが、それはさておき、所沢の歴史で庚寅に起こった江戸時代以降の出来事をピックアップしてみましょう。



「庚寅」に起こった江戸時代以降の所沢の歴史

和 暦	西 暦	で き ご と
天正18年	1590年	徳川家康が関東へ入国し、市域にも旗本の知行が宛がわれる
慶安3年	1650年	このころの市域の村は19ヶ村でした
宝永7年	1710年	前年に将軍綱吉が亡くなり、北野村と勝楽寺村で犬養育金の返済が始まる
明和7年	1770年	このころ所沢の市は3と8のつく日に開催の「三八市」となっていた
天保元年	1830年	重松流祭りばやしの創始者古谷重松が所沢村植宿に生まれる
明治23年	1890年	前年の町村制の施行に続き、府県制郡制が公布され埼玉県入間郡に属する
昭和25年	1950年	埼玉県内8番目に市制が施行され「所沢市」が誕生する

十干(甲乙丙丁戊己庚辛壬癸)と十二支(子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥)を組み合わせた干支は、60年周期で巡ってくるわけですが、こうしてみると、庚寅の年には意外に大きな出来事が起きていることがわかります。天正18年の徳川家康の関東入国や明治23年の町村合併の実施、昭和25年の市制施行は大きな出来事といえるでしょう。今年は何といても市制施行60周年の記念の年です。昭和18年に1町5ヶ村(所沢町、松井村、富岡村、吾妻村、小手指村、山口村)が合併して所沢町となり、終戦後の昭和25年に市制が施行されました。さて今年はどうなる年になるのでしょうか。

1月にご覧いただける展示など

場 所	内 容	
常設展示室	所沢の歴史・昔の暮らし・自然など	
メモリアルルーム	並木東小学校の「記憶」	
南棟3階階段脇掲示板	ミニ写真展	山口地区の移り変わり 山口地区の移り変わり part2
		1月11日(月)まで 1月12日(火)から
3階中央棟廊下壁	今月の航空写真	中富南四丁目付近
		2月28日(日)まで

ふるさと研究担当では、ふるさと所沢への理解を深めていただくため、今後「ふるさと研究講座」を継続して開催します。すでに実施した「入門 所沢市史」を皮切りに、閲覧学習室の資料に親しむ「歴史資料の取り扱い方講座」や、企画展示の解説会、市内の史跡探訪など、さまざまな内容を取り揃えていきます。

これらの講座のうち、基本となるカリキュラムについては、同内容の講座を複数回実施する予定です。用事があったり、満席で参加できなかった方にも、またの機会を持てるようにしていきます。また、修了者（事前に参加申し込みし欠席なく参加された方）には「修了証」をお渡しします。

所定の講座を修了した方には、さらにステップアップした講座にご参加いただき、未来の「博物館活動」へ向け、市民学芸員（仮称）としてその知識を活かしていただけるよう、内容を工夫していきたいと考えています。なお同じ講座を2度受講することはできません。詳細については当紙面での続報をお待ち下さい。

ふるさと研究講座 入門 所沢市史 (第1回)

ふるさと研究講座「入門 所沢市史」第1回目が、歳瀬の12月12日土曜日、生涯学習推進センター2階学習室201で開催されました。募集定員50名のところを予想を大幅に超えるお申し込みをいただき、会場の定員ぎりぎりとなる80名まで受け付けての開催でした。会場が窮屈で、参加者の皆さんにはご迷惑をおかけしました。

初回は所沢の自然から近世（江戸時代）まで。2回目の1月16日には、近現代の歴史や文化財等を題材に、全2回で「かけ足」の歴史を学びます。

なお、今回参加できなかった方を対象に、同じ内容の講座を3月に開催します。詳しくは「翔びたつひろば」3月号のお知らせをご覧ください。

門松（かどまつ）の話



ふるさと研究市民トピック vol.7

門松といえば、所沢地域でも昔から正月になると家の門口に立てた飾り物です。

門松について、市内小手指地区では先祖の話として「門松は立てるな」という言い伝えがあったといえます。それは、江戸時代に北野村（現北野、北野新町、北野南、小手指南、小手指元町、小手指町＝小手指地区）では、門松を江戸の「御領主様」（旗本）に納入していたため、恐れ多いことから禁忌とされてきたというのです。北野村の旧名主家には、江戸の武家屋敷に門松を納めた納品書が数点残されています。いずれも年代は記されていませんが、ほとんどは幕末期と推測されます。

それによると、名主家は「門松屋」と呼ばれ、内容を見ると、例えば11月18日付けのあ

る納品書には、「大松6本、中松44本、大笹100本、中笹220本、小松50本、杭木15本」を納めたことが書かれています。竹の代わりに「笹」が使われていることや、どう使ったものなのか「杭木」とあるのが面白いです。江戸時代の武家屋敷の門松がどのような飾りだったか定かではありませんが、今日のような飾り方でなかったことは想像がつきます。

このほか、久米村（吾妻地区）や大鐘村（山口地区上山口）でも領主の旗本の家に門松を納めていることがわかっており、狭山丘陵周辺の村で松が特産であったことが窺えます。

それにしても「御領主様」をはばかって門松を立てなかった言い伝えは、身分制社会という時代性を感じる話ではないでしょうか。